

『西夏文金剛經の研究』を読んで

吉池孝一

一

荒川慎太郎著『西夏文金剛經の研究』(京都:松香堂書店、2014年。以下、本書と称する)は、死滅した言語・文字である西夏語・西夏文字によって記された『金剛經』『金剛頌』『金剛經纂』の書誌、音韻、文法にわたる総合的な研究であるとともに、これまでの西夏語研究の成果をまとめた一書ともなっている。本書の構成は、文献学的解題、音韻研究、文法研究よりなる第Ⅰ部の研究編、西夏文を西夏文字フォントで翻字し西夏語音と日本語訳と注を付した第Ⅱ部の「テキスト編」、ロシア東洋学研究所蔵の原資料の影印よりなる「図版編」の第Ⅲ部となっている。

二

研究対象の西夏文『金剛經』『金剛頌』『金剛經纂』の資料としての性質について確認をすると次の二点となろう。その一、漢訳からの重訳であり、西夏文と漢文の両者を比較しつつ研究を進めることができる。その二、漢訳より西夏文に重訳された仏教經典には京都大学蔵西夏文『大方広仏華嚴經』、ロシア科学アカデミー東洋学研究所蔵西夏文『妙法蓮華經』などがある。前者は、漢語を逐字的に西夏語に置き換えた“擬漢文体”とされ、未解読文字の解読の初期においては『番漢合時掌中珠』とともに二言語対照テキストに準ずる資料として有用であった。後者は、漢文と逐字的に一致しない難解な文章とされ、解読が進んだ段階における西夏語の文法研究に寄与するところが大きい。本書が扱う西夏文『金剛經』『金剛頌』『金剛經纂』は後者に相当する。

なお、西夏文『金剛經』等が、西夏語の文法研究に寄与するという点については、西田龍雄 1976(「2 西夏文『金剛般若波羅蜜經』」、『西夏文華嚴經』Ⅱ, 京都大学文学部)に「この金剛經は、西夏語文法を再検討する上で、重要な資料の一つであるといえる。」(あとがき 19頁)とある。

三

第Ⅰ部の文献学的解題は、ロシアのクチャーノフ氏が1999年に公表した目録の書誌データを改訂・増補した部分、漢訳と西夏語訳との対応を究明した部分(たとえば西夏文『金剛頌』は、漢訳『梁朝傅大士頌金剛經』に『金剛經般若經疏論纂要』を科として付したもののからの重訳であるなど)、西夏文『金剛經』等の諸版本の系統を究明した部分(たとえば複数の異なる版の西夏文『金剛經頌』の本文部分が、同じ種類の西夏文『金剛經』を参考にしているらしいなど)からなる。

音韻研究では、まずこれまでの研究を総括する。そのなかでも、西夏語の音韻研究の根本資料である『文海』(刊本と写本)、『同音』(甲本と乙本)、『雜類』(刊本と写本)の関係を明らかにした部分が興味深い。とくに『同音』甲本の文字の配列順を、『文海』刊本で再

整理したものが『同音』乙本であり、その『同音』乙本から『文海』収録字を除いたものが『雑類』刊本であるという議論は際立っている。

本書の音韻研究の中心は、次にあげる対音資料にある。西夏文『金剛經』『金剛頌』『金剛經纂』の中には漢語音を西夏文字で音写した部分があり、これは漢語音韻と西夏語音韻の両者の研究に資するものとなる。資料中の漢語音が『中原音韻』(1324年)のような近世音をよく反映するという結論は、『番漢合時掌中珠』が漢語西北方言を反映しているのとは異なっており興味深い。おそらく、経典は中原音韻式の漢語音で読誦され、西夏文への翻訳において、その漢語音が反映したのであろう。そのほかには、チベット文字の音注が付された西夏文『金剛經頌』刊本断片の紹介があり、これまでに再構成された西夏語音の確認に資するものとなっている。

文法研究は、西夏語文法を概説した2節と、否定表現を研究した3節とからなる。前者の2節は、「ある程度定説となった文法事項の整理と説明が主となる。」(本書125頁)とあるように、『金剛經』『金剛頌』『金剛經纂』の西夏文を例文としてあげ、これまでの文法事項を体系的にまとめつつ問題点を指摘し解決の案を提示したものである。3節は、「否定表現の多様さと登場頻度は、西夏語否定文の文法研究にとってまたとない資料といえる。」(本書125頁)とあるように、西夏語の否定表現・否定文について記述したものである。とくに二重否定文についての記述に新しさがある。もっとも、「西夏語において二重否定表現は決して頻繁に見られるものではなく、果たして本来の西夏語に存在した表現なのか、仏典の訳出用に、いわば人為的に創出された表現なのか、結論を出すことは難しい。」(本書189頁)とあるように、さらなる検討が必要なのであろう。

四

第Ⅱ部は、西夏文を西夏文字フォントで翻字し西夏語音と日本語訳と注を付した「テキスト編」となっている。西夏語訳経典に対応する漢訳経典には多種多様な異本があり、西夏文『金剛經』『金剛頌』『金剛經纂』が基づいた漢訳を特定するのは困難であろうが、第三者による検証の便宜のために、「西夏文」、西夏文の「日本語訳」のほかに、「漢文」を併記してあったならば読者にとっては便利なものとなろう。もっとも出版物としては頁数の制約を受けているのであろう。

五

第Ⅲ部は、ロシア東洋学研究所が所蔵する西夏語訳本の原資料の影印よりなる「図版編」となっている。『金剛經』にはサンスクリット原本、漢語訳本、チベット語訳本、コータン語訳本、ソグド語訳本、蒙古語訳本、満洲語訳本など諸本が知られている。西夏語訳本の原資料の公表という点についていえば、Grinstead1971(『西夏大蔵經』)において、すでに本書図版編の『金剛經』No.101の影印と同一のものが公表されている。しかしながら、本書により西夏文『金剛經』『金剛頌』『金剛經纂』にわたる原本影印が公となったことは、西夏仏教、西夏史、西夏語の研究にとっては言うまでもなく、『金剛經』の研究にとって福音である。

六

結びとして。古文献の言語学的研究といっても、死滅した言語・文字を対象としたばあいと、既知の言語・文字を対象としたばあいとは、異なる面があるようにおもう。死滅した言語・文字のばあい、初期にあっては大胆な仮説を立てながら少々の無理をしてでも解読を推し進めざるをえない。したがって、解読が進み、あるていど論が出そろった段階で、これまでの論をまとめて体系化する作業が必要となる。どのような研究でも同様な過程を経るとも言えるが、死滅した言語・文字の研究にとって、この作業は、既知の言語・文字の研究以上に重要なことであり、意義のあることと考える。こうしたまとめと体系化を基盤として、次の段階に進むことになるわけであるが、私にとって、『西夏文金剛経の研究』はそのような役目を果たしてくれる書ともなっている。